二松学舎大学人文学会第一三三回大会　大会次第

■日時　二〇二六年一二月一二日（土）　一三時～（開場は一二時半）

■開催方式　対面（講演のみオンライン[YouTube]兼用）

■会場　二松学舎大学 九段キャンパス四号館

※開会式は四〇五一教室で行います。最初は、四〇五一教室にご参集ください。

■パネル展示・伊豆原潤星ゼミナール（四〇七二教室）

◎謎解きを通じた地域連携型ＰＢＬの実践――体感型推理ゲーム『名探偵 刑部大輔の事件簿』の企画・運営を事例として

■開会の辞（一三時～）

■研究発表（四〇五一教室・四〇六一教室、一三時一〇分～一四時四〇分）

◆四〇五一教室

◎小野寺 健「『移風易俗』の変遷――感化する楽とされる楽」

◎杢屋 幸明「後漢霊帝期の三公について」

◎三木 啓介「『呉都賦』の『捷若慶忌、勇若専諸』について――慶忌像考察の一環として」

◆四〇六一教室

◎佐藤 幹大「学習塾における『疑問表現』の実際――習熟度の異なる生徒による読解ストラテジーの相違」

◎神本 一喜「谷崎潤一郎の少年表象」

◎徐 愷「身体論で読む『春琴抄』」

■パネル発表（四〇五一教室　一四時五〇分～一五時）

◎伊豆原潤星ゼミナール「謎解きを通じた地域連携型ＰＢＬの実践――体感型推理ゲーム『名探偵 刑部大輔の事件簿』の企画・運営を事例として」

■講演（四〇五一教室　一五時半～一七時二〇分）

◎長島 弘明「私の上田秋成伝記研究」

■閉会の辞（一七時二〇分～）

要旨集

〈研究発表〉四〇五一教室

「移風易俗」の変遷――感化する楽とされる楽

小野寺 健

本発表の趣旨は礼楽思想における重要な理念である「移風易俗」について、その「感化」の方向性を問題として論じるものである。

音楽が人の心を感動させるという言説は、古代中国においては、それは単なる芸術論である前に、儒教的な政治論であった。法治よりも徳治を重んじる儒教において、礼楽思想は、規範的価値を持つ「礼」と「楽」とによって民衆を教化し、社会秩序に組み込むという考えを持つ。そしてそれは『孝経』で「風を移し俗を易ふるは、楽より善きは莫し（移風易俗、莫善於楽）」と称揚されることで、漢代以降、儒教と「楽」とは不可分の関係となる。

しかしここで「楽」がいかにして民衆を教化しうるかという、作用の機序が問題となる。一つには聖人や先王といった特権的人物の創作した「楽」が人々を感動させ正しき方向へと導くというもの、また一つには「楽」は心を感動させるものであるのと同時に、感動の表れであるとし、為政者はその表象を読み取ることで、風俗の紊乱に対処するというものである。

この二つの方向性について『孝経』に対する三種の注釈と、関連する文献をもとに、その変遷を辿りながら考察を行ってゆく。

（おのでら・たける／二松学舎大学文学研究科博士後期課程）

後漢霊帝期の三公について

李屋 幸明

後漢霊帝期と言えば党錮の禁や宦官専権などが有名だが、三公に着目してみると一人当たりの平均任官年数が後漢全体の中でも短いことに気づく。頻繁に交替しているということであるが、そのような中でも特定の人物たちが頻繁に就任・罷免を繰り返している。中本圭亮氏は、霊帝期に厚遇された「大官僚」は帝師として霊帝と私的関係にあった者たちであると指摘する。そうであるならば、上記の特定の人物たちの中で、霊帝と私的関係には無かったものたちに着目すれば、霊帝が三公、引いては官僚に求めたものが分かるのではないだろうか。

ところで、三公に頻繁に挙がる特定の人物たちに更に注目してみると、光和7年／中平元年、中平2年を境に顔ぶれが変わることにも気づく。これは一体どのような意味をもつのであろうか。

本発表では光和7年／中平元年、中平2年に補助線を引き、三公人事に着目し、当時の政治状況について検討する。その上で霊帝期の三公は宦官を意識したものであったこと、しかし当初の対抗するための存在から、売官の影響を受け、結託する存在に変質したことを指摘する。

（もくや・たかあき／二松学舎大学文学研究科博士後期課程）

「呉都賦」の「捷若慶忌、勇若専諸」について
――慶忌像考察の一環として

三木 啓介

西晋の左思「三都賦」を構成する「呉都賦」の一節に、「捷若慶忌、勇若専諸」とある。ここで呉人の「捷」と「勇」の直喩として用いられているのは、いずれも春秋呉の人物である。慶忌は要離に殺された呉の王子、専諸は公子光（のちの闔閭）のために王僚を殺した暗殺者として名高い。本発表では前者の慶忌をとりあげるが、その理由は以下の疑問による。

この一節において、慶忌はなぜ「捷」、すなわち敏捷性に優れた人物とされているのであろうか。確かに、人並み外れて素早い人物として慶忌を描く文献は少なくない。だが、「呉都賦」の専諸のように「勇」の人とする文献や、「捷」と「勇」のいずれも備えた人物とみなす文献もある。むしろ、早期の文献ほど慶忌を両方の資質を備えた人物として描いている。それなのに、なぜ「呉都賦」では「勇」ではなく「捷」が慶忌の特長として選択されたのか。

本発表では、慶忌を描く先秦期から両漢期の文献を整理し、前漢の武帝期に「捷」のみを慶忌の特長とする修辞が確立し、その後も継承されていったこと、そして「呉都賦」の「捷若慶忌、勇若専諸」もその延長線上にあることを提唱する。

（みき・けいすけ／京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

〈研究発表〉四〇六一教室

学習塾における「疑問表現」の実際
――習熟度の異なる生徒による読解ストラテジーの相違

佐藤 幹大

本研究では、個別指導塾の古典読解で選択肢を選ぶ授業の会話を録音・文字化し、生徒の疑問表現と読解の過程を分析した。

本研究で考察する疑問表現の例は、「ここの主語と同じひと？」「過去？これ」「これなに？」「このたまえるって敬語？」である。

対象は高校生2名、生徒T（習熟度・高）と生徒S（習熟度・低）である。約 15 分間の会話データから以下の点が明らかになった。

疑問表現の総数は、生徒Tが 41 回、生徒Sが 44 回であった。回数には大差がなかったが、使われ方に以下の違いがみられた。

(1) 生徒Tは自分の読みや判断を示して確認する傾向がみられ、生徒Sは語句や文法などを一つずつ確認する傾向がみられた。

(2) 同じ解答に至っても、読解の過程は大きく異なった。生徒Tは登場人物の関係性から答えを選択していたが、生徒Sは語句や文法、反実仮想などを順に確認し選択した。

本研究は疑問表現の種類や回数を考察するだけでなく、学習塾での談話データを用いて、読解の過程を分析した点に新規性がある。

（さとう・かんた／二松学舎大学国文学科四年）

谷崎潤一郎の少年表象

神本 一喜

谷崎潤一郎には〈少年物〉という子どもを主人公とする作品群がある。佐藤春夫が「少年を主人公或は重要な人物にしてゐる作品が少なくとも四五篇はあるだらうが、それぞれ相当よく書かれてゐると思ふ」と言及しているものの、このような作品群に対する研究は、関西移住以降発表された「痴人の愛」「卍」「春琴抄」等の作品に比して充実しているとは言えない。

本発表では、〈少年物〉とされる作品の中でも、主に語りの観点から、一九一一［明治四四］年六月に雑誌『スバル』に掲載された「少年」を分析し、「私」の二重化が起きていることを指摘する。これは同時代における少年表象や、日本近代文学における子ども像との比較としても異質であり、いわゆる子ども像の類型についても批判的に検討していく。

また、「少年」以外の〈少年物〉テクストについても言及しつつ、谷崎作品における〈少年〉がいかに形成されているか分析することは、後年「鍵」や「瘋癲老人日記」に代表されるような〈老い〉の表象と無関係ではない。本発表を、谷崎作品を「老いること」の観点から通史的に眺める視座としたい。

（かみもと・かずき／二松学舎大学職員）

身体論で読む『春琴抄』

徐 愷

本研究は、谷崎潤一郎『春琴抄』における〈身体〉の表象と語りの特質を、身体論の視座から再検討し、新たな解釈の可能性を提示することを目的とする。従来の研究では、春琴の火傷事件をめぐる犯人捜しや、女性崇拝、サディズム・マゾヒズムなどの観点から多くの議論が展開されてきた一方、〈身体〉をめぐる語りの特殊性や視覚以外の感覚、とりわけ盲人の身体感覚については、十分に検討されてきたとは言い難い。

本研究では、師弟関係と介護関係が重層的に絡み合っている春琴と佐助の関係に着目し、二人の関係を相互作用によって成立する身体的関係として捉え直す。その分析には、同時代評および先行研究を整理した上で、テクストの分析を中心にメルロ＝ポンティの〈間身体性〉の概念を導入し、身体感覚と身体間の相互作用に焦点を当てて新たな読解を試みる。さらに、墓石の設計や夜の寒ざらいなどの場面を取り上げ、〈ハビトゥス〉と〈パフォーマンス〉の概念を補助線として、佐助の行動が長年の修練や師弟関係を通じていかに形成されるのかを考察する。

（じょ・かい／二松学舎大学文学研究科博士前期課程）

〈講演〉四〇五一教室

私の上田秋成伝記研究

長島 弘明

私の今までの近世文学研究のうち、上田秋成の伝記研究についてお話ししたい。研究で新たに明らかにした事跡の一部を挙げれば、以下の通りである。

1. 秋成の家族・親族の発見―実母とその家族・養家島屋の祖父―
2. 秋成の最初の文学活動の探索―二十歳の発句―
3. 秋成の青年・壮年時の本名（通称）の確定―「島屋仙次郎」―
4. 秋成が『諸道聴耳世間狙』『世間妾形気』『雨月物語』の作者であることの確証―「損徳叟」「和訳太郎」「剪枝畸人」―

（ながしま・ひろあき／東京大学名誉教授）

〈講演者プロフィール〉

一九五四年生まれ、東京大学名誉教授。二松学舎大学では、二〇一九年から二〇二四年まで特別招聘教授を務めた。日本近世文学、特に上田秋成を専門としており、岩波文庫の『雨月物語』では校注を手がける。著書に『雨月物語の世界』（ちくま学芸文庫）、『秋成研究』（東京大学出版会）、『上田秋成の文学』（放送大学教育振興会）など多数。